（様式２－２）

Ⅰ　学校の概要

学習意欲向上モデル校事業　**多度津町立多度津中学校**

◆児童生徒数及び教員数

〇生徒数

第１学年	第２学年	第３学年	特別支援	全　校
６学級 １７８名	６学級 １７９名	６学級 １８６名	３学級 １０名	２１学級 ５５３名

〇教員数　４０名

◆学校の特色

多度津町は穏やかな気候・風土に恵まれ、人の暮らしや心の在り様が安定しており、その中で育った生徒たちは純朴で、学校の授業を大切にして学習すること、なかまや教師と良好な関係を築きながら学校生活を送ることができている。しかし、生活習慣や心の安定に課題があり、問題行動を繰り返す生徒がいる。また、課題が顕在化してはいないが、よいことをしよう、よくないことを改善しようとする行動や意欲が乏しい生徒も見られる。それらには、家庭の問題など様々な背景にも要因があると考えられるが、一人一人の生徒を見取ると、「良い生活習慣が身に付いていない」、「自分に自信がもてない」、「他者を信じる力が弱い」、「他者と心を通わせて協働することの良さに気付かない」、「学ぶ力が身に付いていない」ことにあると考えられる。

学校教育目標「チャレンジ精神をもち、共に未来を創造する生徒を育てる」の下、全ての教育活動を通して一層の工夫・改善を進めている。

Ⅱ　研究主題等

研究主題

生徒が主体的に学び、学びの成果を実感できる授業づくり

◆研究主題設定の理由

平成 30 年度の実践の成果として、県学習状況調査の生徒質問紙で「話し合う活動をよく行っている」「授業の最後に、学習内容を振り返る活動をよく行っている」などの項目について、肯定的な回答が県平均を上回った。また、数年来「授業は楽しいと思う」の項目において、肯定的な回答が県平均を下回ってきたが、昨年度は良い傾向が見られた。これは本校の授業実践の成果であると考える。従って本年度も引き続き研究を進めていきたい。一方で教師アンケートから、生徒一人一人が興味・関心をもって主体的に取り組む授業づくりや、生徒自身が学びの成果を実感できる振り返りは十分でないと感じていることがうかがえる。そこで、「生徒の興味・関心」「学習意欲喚起」をキーワードに「生徒が主体的に学ぶ授業」「生徒が学びの成果を実感できる授業」を目標として授業改善に取り組むことが重要であると考え、本研究主題を設定した。

◆研究内容及び方法

①　教科を超えた汎用的な授業づくり
- 学習指導案の法則化
- 「学び合い」を効果的に位置付けた日常的な授業実践を推進
- 生徒の興味・関心を高める学習課題の設定

②　見通しをもった研究体制づくり
- 全教員による公開授業（一人年２回）→　外部講師（指導主事）を招いて研究協議を深める。
- 研究成果をつなげる、校内研修のサイクル化

Ⅲ　研究実践

◆指標設定と達成に向けた取組

1　主体的な学びを実現する授業づくりに向けて

（ 生徒質問紙 ）	**授業は楽しいと思いますか。**
（ 教師質問紙 ）	**生徒の興味・関心を高める学習課題の設定を工夫していますか。**

指標

（ 生徒質問紙 ）「授業は楽しいと思いますか。」（①思う＋②どちらかといえば思う）の合計

5月調査	→	目標値	→	11月調査
７５％		８０％		７９％

〈生徒の意見〉

・友達と意見の交流をしたり、一緒に考えたりする時間があるから楽しい。
・自分が知らなかったことを知ることができる。
・iPadを使ったり、コンピュータルームで授業を受けたりできるからおもしろい。

（ 教師質問紙 ）「生徒の興味・関心を高める学習課題の設定を工夫していますか。」
（①できている＋②どちらかといえばできている）の合計

5月調査	→	目標値	→	11月調査
６９％		１００％		８１％

2　学びの成果を実現する授業づくりに向けて

（ 生徒質問紙 ）	**学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを広げたり、深めたりすることができていますか。**
（ 教師質問紙 ）	**生徒が学びの成果を実感する授業を工夫していますか。**

指標

（ 生徒質問紙 ）「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを広げたり、深めたりすることができていますか。」（①できている＋②どちらかといえばできている）の合計

5月調査	→	目標値	→	11月調査
７９％		８５％		７７％

〈生徒の意見〉

・男女が仲良く、お互いにいろいろな話し合いができている。
・グループ学習のときに友達に分からないところを聞けるので助かる。
・自分と違う意見を聞けると勉強になる。

（ 教師質問紙 ）「生徒が学びの成果を実感する授業を工夫していますか。」
（①できている＋②どちらかといえばできている）の合計

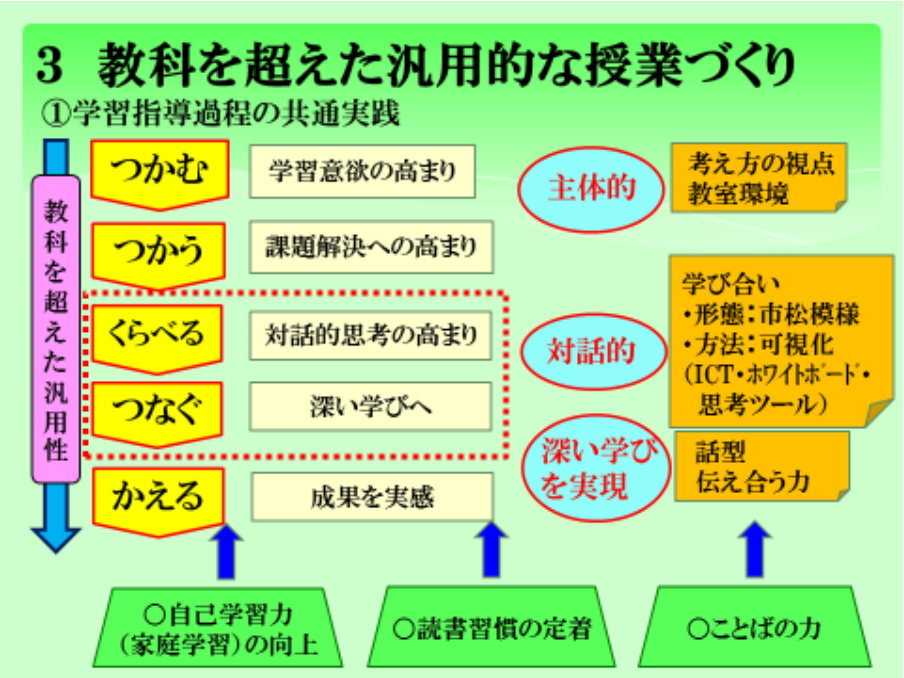
5月調査	→	目標値	→	11月調査
６６％		１００％		７０％

指標の達成に向けた実践

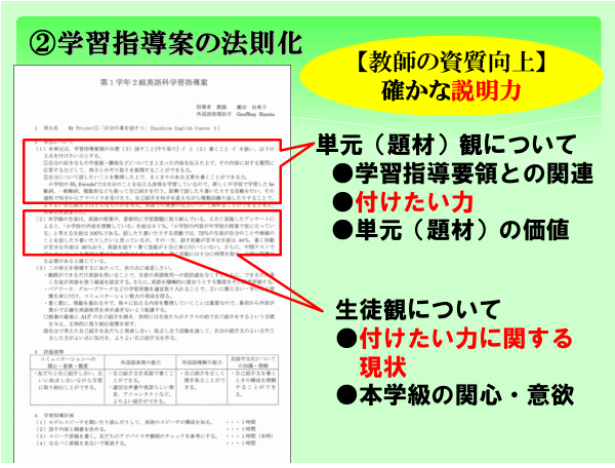
1　教科を超えた汎用的な授業づくり

教師全員が、共通した学習指導過程を実践する。また、授業では生徒同士をつなぐ「学び合い」を日常的に行うよう工夫する。さらに、法則化された共通の学習指導案を用いることで、研究授業後の授業討議において、教科や学年の枠にとらわれない話し合いが可能となる。

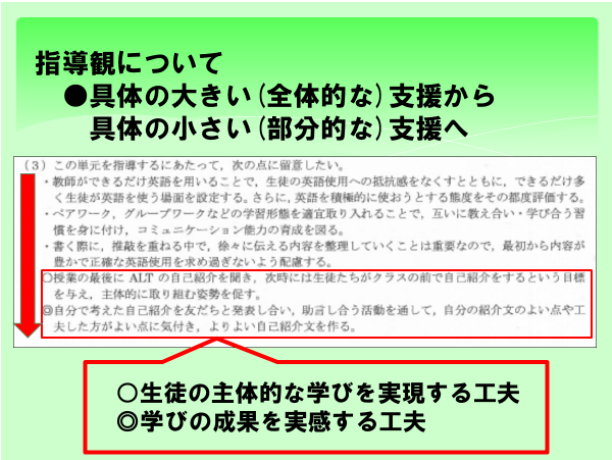
[学習指導過程の共通実践]

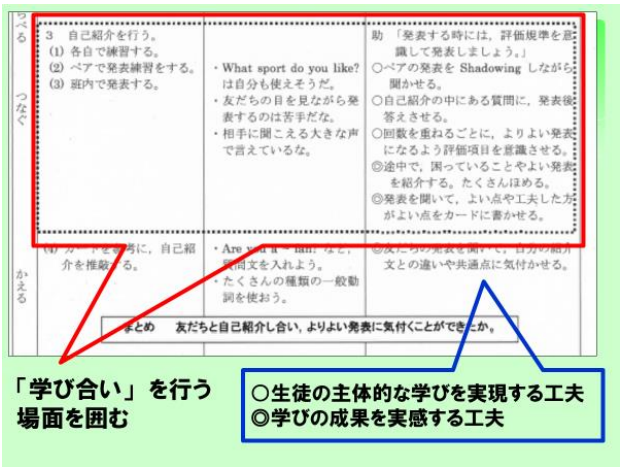


[学習指導案の法則化]



[生徒同士をつなぐ「学び合い」の日常化]

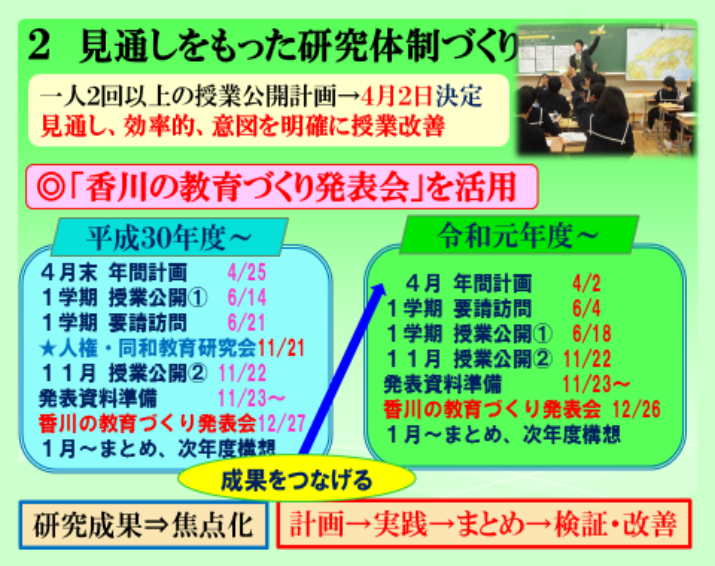




２　見通しをもった研究体制づくり

全教員が年間２回以上授業を公開し、研究に向けた取組を実践発表する。その際、外部講師（指導主事）を招いて、研究協議を行う。討議にあたっては「主体的な学びを実現する授業づくりに向けての工夫」「学びの成果を実現する授業づくりに向けての工夫」はどうであったかという研究テーマに対して、ＫＪ法を用いて話し合いを行う。

６月と 11 月に研究授業を行い、12 月の香川の教育づくりを活用して研究の取組を発表し、３学期に研究の検証を行い、研究成果と課題を焦点化して次年度へつなげる。



◆特徴的な取組

１　主体的な学びを実現する授業づくりに向けての実践

（１）つかむ

理　科

単元名：動物のからだのつくりとはたらき

学習課題：ごはんを噛むとなぜ甘くなるのだろう。

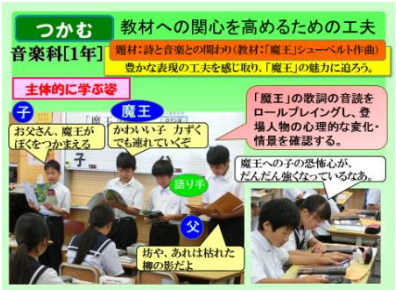
授業前のアンケート結果から、ご飯をよく噛んで食べたことがある生徒は約７０%いた。その際に甘みを感じた生徒は４０%だった。そこで、実際にご飯を噛んでみることにした。生徒から「何回も噛んだら粒が小さくなった。」「ちゃんと噛んで食べなさいってお母さんから言われるのは、よく噛んだら消化や吸収をしやすくなるからかな。」とか「ご飯を噛んだら甘くなるとは聞いていたけど、３０回噛んだぐらいから甘くなってきた。」「なぜ、ご飯を噛んだら甘くなるのかな。」というつぶやきが聞こえてきた。そこで、「ご飯を噛むとなぜ甘くなるのだろうか。」という学習課題を設定した。実体験から課題を導くことで、その後の実験に生徒たちは意欲的に取り組んだ。

音楽科

単元名：詩と音楽との関わり（教材：「魔王」シューベルト作曲）

学習課題：豊かな表現の工夫を感じ取り、「魔王」の魅力に迫ろう。

「魔王」は４人の登場人物を一人の歌い手で独唱する詩と音楽が関わり合った劇的な声楽曲である。この教材への関心を高め、主体的に学ぶ工夫として、歌詞の音読をロールプレイングする活動を取り入れた。ロールプレイングの活動を通して、学び合い班を使って４人の登場人物の役割に分かれて読み合ったり、学級の仲間の前で発表したりすることで、それぞれの登場人物の気持ちやその変化を考えさせた。生徒の感想として、「子は、魔王への恐怖心がだんだん強くなっている。」「父は、子を落ち着かせるために常に冷静な様子である。」などが出された。子・父・魔王それぞれの登場人物の心理的な変化や情景を確認することができ、学習課題「豊かな表現の工夫を感じ取り、『魔王』の魅力に迫ろう。」につながる導入となったと考える。



（２）つかう

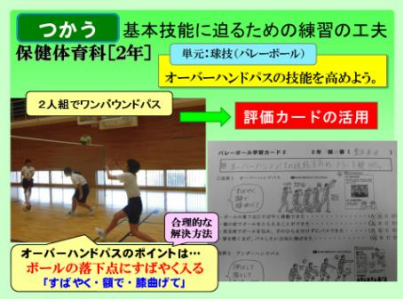
数学科

単元名：反比例の利用
学習課題：ガソリン車とハイブリット車では、どちらが得か。

「地元多度津町から富士山まで自動車で往復する場合、ガソリン車とハイブリッド車ではどちらが得になるだろうか。」という課題に対して、関数領域における既習事項を活用し解決していくという授業である。起点を地元にしたことと、実際に授業者が富士登山をしたときの写真から、生徒は興味をもって課題に取り組むことができた。関数領域の授業では導入の時点から式・表・グラフの３つの要素を常に意識させた。どの要素を利用しても生徒は主体的に課題に取り組むことができた。また、必要な情報をすべて最初から与えてしまうのではなく、どんな情報が必要かを考えさせることで、情報の活用の仕方を意識させることを心がけた。グループ活動の際には普段の座席ごとのグループではなく解決方法ごとのグループを作り、同じ考え方をもつ者同士が集まることで、思考の流れを共有することができ。現実には自動車以外にも航空機や鉄道など様々な交通機関があることや、共に行動する人数によって損得はかなり左右されるはずなので必要な情報を得た後、その情報をどう活用するかについては各自でしっかり考えることが大切であるという話をして授業を終えた。

保健体育科

単元名：バレーボール
学習課題：オーバーハンドパスの技能を高めよう。

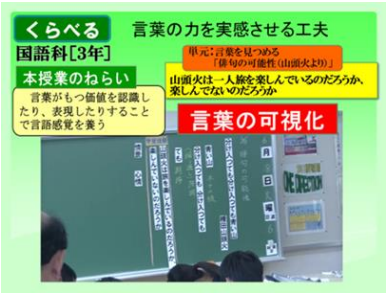


単元「バレーボール」において、「オーバーハンドパスの技能を高め、ゲームで使おう。」を目標に、パス練習から取り組んだ。まず、オーバーハンドパスが上達するための合理的な解決方法を確認した上で、そのポイントを意識しながらグループごとに練習させた。「つかむ」の場で、上手な生徒に模範となる動きを全体の場で行わせ、ボールの落下点に入るための技能のポイントについての合い言葉「すばやく・額で・膝曲げて」を確認した。そして、２人組で合い言葉を口ずさみながらワンバウンドパスの練習をした。教師は、パス練習を巡視しながら、タイムリーに称賛や助言を行うことにより、生徒は「ここを～すれば、できるようになる」という、合理的な納得感をもって主体的に活動することができていた。

（３）くらべる

国語科

単元名：言葉を見つめる「俳句の可能性」（山頭火より）
学習課題：山頭火は一人旅を楽しんでいるのだろうか。楽しんでいないのだろうか。



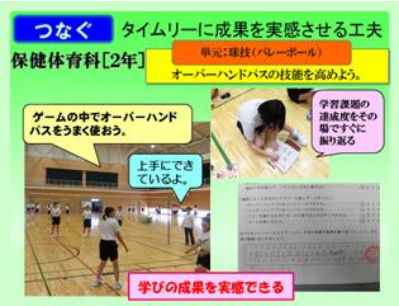
単元「言葉を見つめる『俳句の可能性（山頭火より）』」において言葉がもつ価値を認識したり、表現したりすることで言語感覚を養う授業を行った。本時は種田山頭火の俳句「分け入つても分け入つても青い山」という形式が特徴的な自由律俳句を取り上げた。俳句の魅力を味わうために、「ても」と「青い山」に注目させ、言葉の可視化を意識した授業を展開した。学び合いの場面では俳句から見える情景と心情を班ごとでホワイトボードにまとめさせた。互いの考えを確かめながら、主体的に自分の考えを表現する姿が見られた。

２　学びの成果を実現する授業づくりに向けての実践

（４）つなぐ

保健体育科

単元名：バレーボール
学習課題：オーバーハンドパスの技能を高めよう。



「つかう」の場面で「オーバーハンドパスの技能を高めるための合理的な解決方法」を確認した上で、２人組で練習させた。そして「つなぐ」の場面で、ボールの落下点に入ることを意識するために、ワンバウンドまでさせてもよいというルールでゲームをした。ボールの落下点に入るまでに時間ができ、余裕を持ってプレーできていた。教師は、ゲームの様子を観察しながらうまく落下点に入り良いパスができた生徒にタイムリーに、称賛や助言を行った。生徒は「落下点に入れば、オーバーハンドパスをうまくコントロールできる。」という、合理的な納得感をもってゲームで成功し、学びの成果を実感することができていた。

家庭科

単元名：地域の食文化（調理実習）
学習課題：調理実習を通して地域の食文化の大切さを実感しよう。

題材名「地域の食文化を学ぼう」において、本時は「調理実習を通して、文化の大切さに気付き、本物のおいしさを知ることができる。」を目標に、多度津町内で収穫した桜の葉を使った桜もちと香川県産のらりるれレタスを使った香り漬けの調理実習に取り組んだ。

ゲストティーチャーとして食の専門家である多度津在住の食文化博士を招き調理実習を行った。切った食材を袋の中に入れて振り、らりるれレタスの香り漬けを作った。生徒からは「おいしくできるといいな。」という声も聞こえてきた。また、桜もちづくりでは、一人一人あんを丸めて包み、桜の葉でくるんで桜もちを作った。桜の葉の塩漬けは多度津町の郷土料理保存会が、多度津の桃陵公園で収穫した桜の葉で作ったものである。生徒は桜もちを作りながら香りも楽しんでいた。

（５）かえる

家庭科

単元名：地域の食文化（調理実習）
学習課題：調理実習を通して地域の食文化の大切さを実感しよう。

地域の食材を用いて自分で作り、食べるという実習を通して、地域の食材・食文化の大切さを実感する授業となった。生徒の感想はミラーリングをして全体で共有した。生徒の感想を一部、紹介する。

- 多度津町や香川県の特産品でこんなにおいしいものが作れるんだとわかった。
- 多度津町の食材を使って、もっといろいろな料理を作りたい。
- 今日の調理実習で作った「らりるれレタスの香り漬け」と「桜もち」を、是非、家で作って家族に食べてもらいたい。
- 料理に何を用いているかは、自分で作らないと分からない。また、地元の食材を使えば食の安全という面からも安心して食べることができる。自分が料理するときは、できるだけ地元の食材を使った料理を作りたい。

などと学びの成果を実感した内容が多くあった。

国語科

単元名：言葉を見つめる「俳句の可能性」（山頭火より）
学習課題：山頭火は一人旅を楽しんでいるのだろうか。楽しんでいないのだろうか。

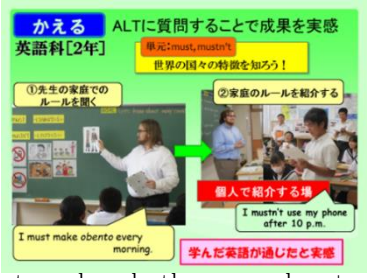
俳句から見える情景と心情を班ごとにホワイトボードにまとめた後、種田山頭火の俳句で学んだ鑑賞の仕方を生かして、尾崎放哉の俳句で鑑賞文を書く活動を行った。「咳をしても一人」この俳句には、山頭火の俳句と同じく、「ても」という逆接の接続助詞が入っていることに多くの生徒が気付き、注目していた。その際、「『咳をしても』を『泣いても』に変えるとどのように印象が変わるか。」という発問をすることで、生徒は作者の強烈な孤独感に気付き、鑑賞文に表現していた。生徒が書いた鑑賞文の一部を紹介する。

・病気になっているけれど、寄り添ってくれる人がいなくて、ただ部屋の中に咳の音だけが響いている情景からますます孤独感を感じる。
・作者は一年中ずっとつらくて悲しい気持ちであることを表現している。

など、「ても」に着目することで、一つの俳句から様々な情景を想像し、鑑賞文を仕上げることができた。

英語科

単元名：ｍｕｓｔ，ｍｕｓｔｎ’ｔ
学習課題：世界の国々の特徴を知ろう！

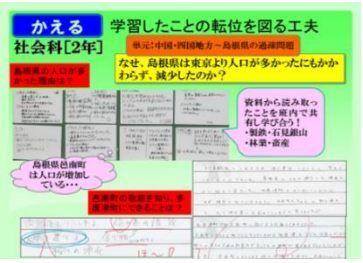


「must」「mustn’t」を使って国についてのクイズをした後、家庭でのルールを英文でまとめ、ALT の先生に紹介する活動を行った。

班ごとに、世界の８か国についてクイズを出し合った後、家庭でのルールについて個人で英文にまとめた。班での活動では、友達と協力して英文を作ったが、個々で、家庭のルールを英文で表すとなると、ミスがたくさん出てきた。しかしミスについて友達や先生に尋ねることで、さらに学びが深まった。そして最後には、生徒一人一人が ALT に「must」「mustn’t」を使って家庭のルールを紹介した。「I mustn’t use my phone after 10 p.m.」「I must wash a bath every day.」など、生徒が今までの学習内容を振り返り、工夫した内容を紹介する姿が見られた。生徒たちは、学んだ英語が通じたと実感できて嬉しそうだった。

社会科

単元名：中国・四国地方～島根県の過疎問題
学習課題：なぜ、島根県は東京より人口が多かったにもかかわらず、減少したのか？



単元「中国・四国地方～島根県の過疎問題」において、島根県は人口が少ないイメージがあるのに、明治時代は東京よりも人口が多かったという事実から、学習課題を「なぜ、島根県は東京より人口が多かったにもかかわらず減少したのか。」として、理由を資料を用いて多面的・多角的に考察する授業を行った。

４人グループになり、一人一人に違う資料を渡し、それぞれが責任をもって資料を読み、読み取った内容を班員で共有した。「たたら製鉄が栄えていたが、八幡製鉄所が九州にできた。」「石見銀山で銀などの生産が行われていたが、衰退した。」「エネルギーが木炭で、中国山地で林業が栄えていたが、石炭がエネルギー資源となった。」「畜産が盛んだったが、北海道開拓やシラス台地での畜産がスタートした。」など、８班すべての班で読み取ることができた。島根県が過疎化した理由は理解できたが、島根県の邑南町は２０００年代に入り人口が増加、とくに２０～４０代の人口が増加している。過疎化が進む島根県内で人口増加している理由を、クイズ形式で確認し、「私たちが住む多度津町内ではどんな取り組みができるか。」を考え、「税金をもっと幼児教育にあてて、そのことをイベントを通じて PR すべきだ。」「企業だけでなく、大学を誘致するべきだ。」「人気チェーン店を出す。」「インスタ映えスポットをつくる。」等、様々な考えが出た。他地域の学習を自分たちの地域に転位して考えることができた。

Ⅳ　研究の成果と課題

＜成果＞

・主体的に学び、成果を実感する生徒が増えている。

重点となる指標の生徒アンケート「授業は楽しいと思いますか。」(75%→79%)、「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを広げたり、深めたりすることができていますか。」(79%→77%)の項目で、肯定的に答える生徒の割合はほぼ同程度である。１年生にとっては学習内容が難しくなること等を踏まえると、生徒の意識の変化からは成果が感じられる。

・指導案の法則化が進み、教員間の議論が深まっている。

指導案を法則化することで、他教科の指導案を読んでも分かりやすい内容になった。指導案に「付けたい力」「付けたい力に関する生徒の現状」「生徒の主体的な学びを実現する工夫」「学びの成果を実感する工夫」を記すことで、授業者及び参観者双方の重点ポイントが明確になった。研究授業後は全教員がグループに分かれ、ＫＪ法を用いて討議をしており、毎回、活発な討議が行われた。討議後には「現職教育だより」を配布し、全教員が討議内容を共有できるようにしている。

・研究に沿った授業づくりの日常化が進んでいる。

重点となる指標の教師アンケート「生徒の興味・関心を高める学習課題の設定を工夫していますか。」(69%→81%)、「生徒が学びの成果を実感する授業を工夫していますか。」(66%→70%) の項目で、肯定的に答える教師の割合が増加している。

＜課題＞

・生徒の言葉の力が十分には身に付いていない。

言葉の力は思考を深めるための基盤であるが、本校の継続的な課題である。授業で現実的に使える話型や伝え合う力についての共通理解を深め、実践に結び付けていく。

・汎用的に活用できる手法の質と量が十分ではない。

今後も各教科で取組を続け、教科を超えて使える手法を明らかにしていく。

・研究に沿った授業づくりの日常化が十分とは言えない。

重点となる指標の教師アンケート「生徒の興味・関心を高める学習課題の設定を工夫していますか。」「生徒が学びの成果を実感する授業を工夫していますか。」の項目で、目標の 100%が達成できなかった。それぞれの工夫点について校内研修及び「現職教育だより」等を通じて共有化を図り、授業改善につなげていきたい。